A Study on "GODENSHO-ENGI"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/20210

真宗談義本

『御傳鈔演義』について

――近世語研究（九）――

深井一郎

はじめに

「御傳鈔演義」という本書の解題に入る前に、角書の「真宗談義本」の説明から始めよう。「談義」とは、〝㈠、はなし合うこと相談してとりはからうこと。談合。㈡、道理を説ききかせること意義を説くこと。文学・芸術その他種々のことについて解説し、論説して示すこと。また、その講義や書物。㈢、仏語。仏教の法義や宗旨について説き明かすこと。説法をすること。また、その話。後には、問答の意に用いる。法談。㈣、意見をすること。ごとを言うこと。また、そのこごと。訓戒。〟[註1]と一般的に理解されている。意味四項の中、㈡・㈢項が該当すると見られ、とくに「真宗」という語を冠して考えれば、㈢項と考えてよいであろう。ところが、「談義本」[註2]という概念は「滑稽本」の前段のものを指しているようである。通俗滑稽小説という性格と、いかにその前段階とはいえ「真宗」という概念とは関係を理解しがたいところである。「真宗談議本」の名称は、最近、高羽五郎氏が「御文浚溝録」を「真宗談義本小系1」[註3]と名付けられたのに依拠したものである。私の理解としては、文学史ジャンルとしての「談義本」ではなく、『真宗における談議の本』という命名であろうと考えている。仏教の説教・説法・法談の類[註4]が、言語研究の資料として価値あるものであることは、すでに指摘されているところである。

近世仏教にあって、談義・説教をもっとも盛んに行なったのは浄土真宗であった。日蓮宗も激しい説教活動を行なったが、真宗が伝統的な安居院流や三井寺派系統の遺産[註5]の上に談義・説教の輪を拡げていったのに比して、日蓮宗は独自の布教方式を重視したためか拡がりに限界が見られる。近世後期、明和・安永頃に、菅原智洞・粟津義圭の両者の活躍によって、真宗の談義・説教は大いに発展し、後の明治以後の節談説教の内容・技巧の基となり、この期の説教興隆の基盤を築いたと言ってよかろう。

菅原智洞[註6]は、石川県羽咋郡志雄町菅原にある浄土真宗本願寺派の明専寺第六世覚山の第三子と生れ、後上洛して陳善院僧樸に師事し、説教師・談義僧として活躍したという。博学で文才は豊かであった。「勧導簿照」「芙蓉篇」「言々海」「巍々篇」「説法百華園」「勧向西方篇」「説法微塵章」「浄土安心要言断疑本」「無尽蔵」「浄土勧化論語」「勧詞小筌」「三文一六八十余座」など多数の説教本を書いている。これらは説話的・文芸的で一般に親しまれ易く、広く読まれたと考えられる。

粟津義圭は、滋賀県大津市木下町[註7]にある浄土真宗大谷派の響忍寺に生れ、高倉学察に入って教学を学んだ。のち唱導に力を注ぎ説教者としての名が広まった。寛政三年二月「徹照西方義」を作っ

て、本願寺派六世能化功存の著「願生帰命弁」と論駁したことは宗門内外で有名であった。教学の研究にも見識があり、談義・説教においても、多く譬喩因縁談を用いた名調子によって教義を平易に説いた実用性に富んだものとして、全国の真宗説教者及び他宗派の談義僧にも手本として珍重がられたという。著書には次のようなものがある。「阿弥陀経依正譚」(六)「一枚起請文説藪」(三)「和讃即席法談」(九)「高僧和讃開導」(三)「二河白道護信録」(三)「同後編」(三)「現世利益辨」(三)「改悔文便導」(二)「新選即席譚」(三)「御伝鈔演義」(十五)「善光寺如来東漸録」(五)「帳五十座法談」(二)「巻懐五十座法談」(二)「袖珍勧考」(一)「初珍勧録」(一)「袖珍勧序考」(一)「浄土現世利益讃」[註8](二)「一枚起請文信鈔」(二)「真宗閑論」(二)「徹照西方義」(二)なお外に「四十八願喚鈔」「正信偈勧則」「御式文述讃」「御文浚溝録」「大坂建立章説」「御文末代」「無智奬訓」「善悪業道談」「高僧和讃写瓶録」「真宗安心消息」「御文不簡摂生譚」「袖珍月しるべ」「御正忌御文高顕録」(三)「正像末和讃可説」(五)などが知られる。(（　）内は冊数)

菅原智洞・粟津義圭という真宗説教者・談義僧によって、大いに流行を見せた書物の一群を「真宗談義本」と名付けたものと理解してよいだろう。「仏教説話」の系譜を受け、中世「咄本」の流れも汲み、同時期の「心学道活」と位相をほゞ同じくするものとして、言語資料たる性格は十分に所有すると考えられる。

「御傳鈔演義」解題

本書は、本願寺三世の覚如（一二七〇―一三五一）が撰述した「本願寺の聖人親鸞伝絵（でんえ）」[註9]（二巻）から詞書だけを抜き出した「御伝鈔（ごでんしょう）」[註10]を粟津義圭が講述したものである。岩波の「国書総目録」では、安永八年版、京大十三巻十冊、東洋大竜谷十巻十三冊、牧野と所在を記している。いま、底本に用いたのは、金沢大学教育学部国語研究室所蔵の板本である。この本は、巻一において十二丁めが一枚欠落し、第十一巻（十一冊目）が欠本である。極めて不備なテキストではあるが、概要は次の通りである。

体裁は、タテ二五・八センチ、ヨコ一八・五センチ。表紙は薄墨色。綴糸は白。何れも原装のまゝと見られる。題簽は、巻一・巻五以外原形或はその一部を残している。鮮明な巻二・巻六・巻七・巻九を基に他を推定すれば次のようになるであろう。

巻一（御伝鈔演義初編　一）　巻二　御伝鈔演義初編　二
巻三　御伝鈔演義初編　三　巻四　御伝鈔演義二編　四
巻五（御伝鈔演義二編　五）　巻六　御鈔演義二編　六
巻七　御伝鈔演義三編　七　巻八　御伝鈔演義三編　八
巻九　御伝鈔演義三編　九　巻十　御伝鈔演義三編　十
巻十一[註11]（御伝鈔演義四編十一）　巻十二　御伝鈔演義四編十二
巻十三　御伝鈔演義四編　十三

十三冊十三巻は題簽によれば、ほぼ等量の四編に編集されていることが分るのである。

さらに内部を見てゆくと、次の二つの事柄が判明する。一つは表紙の次ぎに、各巻目次を掲げているが、その目次の上に、巻一から巻六までは「演義巻一～六　目次」と記し、巻七から巻十三までは「御伝鈔演義巻七～十三　目次」となっている。このことは、目次表題の記載については、十三巻十三冊が、二分されて、各別個の書き方を持ったと見られることである。ついで、もう一つは、各巻の目次及び本文中に、巻一から巻六にわたって、「第一段」から「第八段」までの見出しが掲げられ、巻七から巻十三に及んで同じく「第一段」から「第七段」までの見出しが付けられている。この事は、目次の上の書名と併せて、全巻が内容的に二大別されていることを意味していると考えられる。もちろん講釈

の基となった「御伝鈔」が二巻二冊の編成であることから、当然予想しうるところである。さらに、この書の刊記は次のように四回にわたって記されている。

〈巻三末〉　安永三年三月吉旦　京都書肆　五条通高倉東入町　北村四郎兵衛／寺町通松原上ル町　菊屋七郎兵衛／寺町通松原下ル町　菊屋喜兵衛／寺町通松原下ル町藤屋東七

〈巻六末〉　安永五年丙申孟春吉旦　皇都書肆　五条通高倉東入町　北村四郎兵衛／寺町通松原上ル町　菊屋七郎兵衛／寺町通松原下ル町　菊屋喜兵衛

〈巻十末〉　安永七年戊戌初冬　皇都書肆　五条通高倉東へ入丁北村四郎兵衛／寺町通松原上ル丁　菊屋七郎兵衛／寺町通松原下ル丁　菊屋喜兵衛

〈巻十三末〉　安永八年巳亥孟春　寺町通松原上ル丁　今井七郎兵衛／五条通高倉東へ入丁　北村四郎兵衛／寺町通松原下ル丁　今井喜兵衛

〔／は改行を示す。以下同じ〕

なお、巻三と巻十の末尾には次の広告・予告の記事がある。

〈巻三末〉　粟津義圭師著述品目、阿弥陀経依正譚　六巻、大経和讃二十二首即席法談　三巻、袖珍勧考　一巻、二河白道護信録三巻、同後編　二巻、帳中五十座法譚　二巻、勧小譚十四首即席法談　三巻、袖珍勧録　一巻、善光寺如来東漸録　五巻

〈第十末〉　御傳鈔演義四編三冊近日出来仕候／巻懐五十座法談二冊出来／勧序考小刻一冊出来

この刊記を見れば、先に述べた内容の四編に編成された、各編ごとに一まとまりのものとして刊記が付けられ、四回に分けて出版されたことがわかる。

なお、巻一の最初に序文一枚が存し、内題は各巻共通して「御伝鈔演義巻一（～十三）」とあり、その下に「粟津　釋義圭　述」と記されている。各巻の丁数は次の通りである。巻一　50、巻二　34、巻三　46、巻四　43、巻五　34、巻六　36、巻七　32、巻八　39、巻九　38、巻十　30、巻十一（不明）、巻十二　45、巻十三　51　である。

「御伝鈔演義」の表記（音韻）

「真宗談義本」と呼びうるものの中、長編とはいえ、たゞ一部の書物を対象とした調査であるから、体系立て物を言うことは不可能である。いまここで取りあげるのは次の各項である。

○四つ仮名・開合
○ワ行の仮名遣
○撥音・促音・拗音表記、音便
○漢字音
○変った音表記

〔以下において（　）内に示す数字は、巻数・丁数及び表裏である。〕

◇四つ仮名・開合

・手足ノカジケルト云事ハナイ（一29ォ）
・氷ノ中テモカヂケル事ナシ（一29ウ）
・些トモカヂケル気色ナク（一30ォ）
・某地某処ニハ良薬カアリ。其地其処ニハ上手ナ医者カアルトイヘハ（一35ォ）
・某地某所ヘハ手前モ参ルホドニ（三35ウ）
・其処何ト云分限者ノ家ニ（五22ウ）
・直ニ取テ（六10ウ）
・直ニ御弟子トナラレタハ（一5ォ）

右の外「ヂヤ」と「ジヤ」は屢々混用される。巻三がとくに激しく17例の中、ジヤ9例・ヂヤ8例と、ほぼ半々である。全体を

通して見れば、「ジヤ」の方が少数である。ほかに

・短イノハ五年三年（四10ウ）
・一途ニ貪著シテ居タハ（四15オ）
・外カラピント鎖ヲオロシテ（五22オ）

このように正しい用法のみのものもあれば、次のように

・申シ出サル、ヲヂヅト待テ御座ル間（五33ウ）
・鴈ガ飛ヘハ石亀ガジタンダ。（七18ウ）

誤用のみが見られるものもある。また、ズ――ヅでは

・害心忽チムズ折シテ（一5オ）
・日数ヲ経ニシタカフテ（一14ウ）
・其疵カラ腐ガ来テ（一14ウ）
・偖キサスト云ハ崩ト云事（一30ウ）
・九歳ノ時カラメヅクラフタト云事（一30ウ）
・梢ニハ花ヲメヅクラフテイル（一30ウ）
・念仏申ス事カ恥ヒヤラ（一32ウ）
・シヅカニ名号ヲ称ヘ玉フ事（一24オ）
・ワヅカ一人前ノ極楽詣カデキル（一30オ）
・イタヅラ事ニナリマシヤウ間（一39オ）
・イヅレモ他力ノ因縁ヲ御存シナケレハ尤ナ事（二30ウ）
・目ゴロノ修行ハ崩レテシマフ。（五26オ）
・彼方ノ御勧化ニアヅカリテ（六32オ）
・其様ナ読ノ下ラヌ未盡理ナ事ハ（七9ウ）
・オノヅト其教ノスタルヲ廃退ト云（七14オ）
・何デモ定木スミカネガハヅレテハナラス（十23ウ）
・随分無疵ナ同行ト見ユレトモ（十二41オ）

これらの外に、ハヅ（筈）マヅ（先）はすべて「ヅ」で表記されており、誤用は見られないようである。「ジ――ヂ」の混用の多いのに比して「ズ――ヅ」の誤用の少さはどうしたことであろうか。

開合に就いては、

○御恩ヲ報スルヤウニト思食レテナリ（一1オ）
○何ゾノ拍子ニハ（一2オ）
○膝クミアフテ晤言ヲスル心地ガスル（一4オ）
○上手ナ絵師ガアテ（一6オ）
○馬ノ蹄マデガ香ヒト云コ、ロナリ（一6ウ）
○御精爽ナシノ御影チヤトハ思フナ（一13オ）
○鱗ノ分トシテ士ヲ呑フトハ（一14ウ）
○長ヒ物語ナレトモ喩況ハ一分ナレハ（一15オ）
○何ソヤ表示ノアル事カト云ニ（一16オ）
○終ニ天下ヲ掌握セラレタ（一16ウ）
○草モ萋々蒼々トシテ見事ナレトモ（一17オ）
○御奉公マフス事ナリ（一26オ）
○泥木塑像ノ絵像木像（一47オ）
○丁度猿ト同シ事チヤ（一48ウ）

巻一における開合にかゝわる異なり語形のほゞすべてであるが、次にあげる二例以外は表記は正しいようである。

○動容周旋自然ト如来ノ徳ガ現れサセラレテ（一2オ）
○アリソウナモノチヤ（一17ウ）

巻二以降も概ね正しい表記をとっている中に、次のような混用や誤記が見られる。これら表記を誤った語に特別な性質はないようである。

○十分ニタベタコ、ロ俚語イヘハ腹ノフクレタノヂヤ（二27オ）
○若我成佛ト云ヲ俚語イヘハ（四35ウ）
○モソツト利口ナ喩モ有フニ（七9）
○堂上堂下末々マテ一統ニ皈依ノ事（八15ウ）

これらの外、先に一例は掲げておいたが、動詞四段ウ音便の形

で恐らくは長音に発音されたかとも考えられるものが多数あるがいずれも正しい仮名遣で表記されている。

女人ヲ誘フテ、句ヲアテガフテ、鰐ヲネラフテ、日数ヲ経ニシタカフテ、雪霜ニアフテハ、など。

また、意志・推量の助動詞「ウ」が付いた語形も、仮名の遣い方は正しいようである。

困フト、佛ニナサフゾト、殿セフト、教マセフトテ、取リ放フナラハ、など。

その外「ヤウナ・ヤウニ」の類は例外なく開音表記をとっている。これに引かれたのであろうか、次のようなものがある。

○シヤウ事ナシニ出家スル族モアル（一27ォ）
○證據ヲ見シヤウカト（二26ォ）
○カクシテ居ヤウヨリハ（三24ォ）
○極楽テ得ヤウト思フテ（五27ウ）

最初の例は「仕様」とも考えられるが、或は「為ヨウ」とも考えられる。後の三例は、助動詞「ヨウ」と見られる。

◇ワ行の仮名

「ワ」については、次の二例が特異である。

○霜雪ヲモイタヽキ射山ニワシリテ（一26ォ）
○残念ナカラ妾ハ是ヨリ帰マセフカ（一46ウ）

前者は、経典に依る「御伝鈔」の本文と見られる文中の用例である。他に例はない。後者は他所に「妾」（一45ウ）「妾」（四7ウ）「僕」（四17ウ）などの例もあり、一般的な傾向として「ワ――ハ」が混用されたものではない。

「ヰ」については次の通りである。

○卒鰐ハ射殺レテ（一14ォ）
○凡夫ノ心ハ贋紫デ、ツヰ見ザメカシヤスイ（二33ォ）

「つゐに」の語は右の外の書中例もすべて「井」表記である。これの外には、次の如きものがある。

○稲麻竹葦ノ如ク御繁昌アリシニ（八16ォ）
○唯今ノ謫居アマリニ湫溢シ（九12ウ）
○衆生ノ方ニ宿善ノナマシヰト熟シタトガアテ（九36ウ）
○タヾ呆了テ居ルハカリチヤ（十13ォ）
○名乗モツイテ居ホドノ身持タ長百姓デ在タ（十二40ォ）

三番目の例「ナマシヰ」は「生しい」（未熟）であり、仮名遣は誤っている。

「ヱ」においては、次の如くである。

○阿ミタ如来ヲ敢オカマス（一4ウ）
○喜フヤウニナリヱタハ、アクマテ凡夫……（二28ォ）
○極楽テ得ヤウト思フテ（五27ウ）
○容易通リエラレヌホドノ険阻（十二12ォ）
○往生一定ノ覚悟ニ原クヤウニハナリヱタ（十三14ウ）

右のように「得」のよみの仮名には概ね「ヱ」が用いられるが中には次の如き例も見られる。

○私ハ得参ルマヒトスゲナフ返答モナラス（十三26ォ）外には、
○絵具ヲ以テ画アヤトリテ（一4ウ）
○益ナヒ事ゲヤト（七20ウ）
○七重ノ膝ヲ八重ニ折テナリトモ（八6ウ）
○説者ノ襟ニツク（十14ウ）
○破タ石ノ再タビイエアハヌ如クジヤトアルニ（十二26ォ）
○国處ヲ擇ハスドコデモツカヘルト云事（十三6ウ）

「ヲ」の仮名の用い方は、接頭語「御」は、御身振・拝顔・精神・御乳ノ下・御居間・御種のように振仮名としては「オ」が多い。中には謫居といった例もある。また、巻一に限って見れば、漢字に付した振仮名は、覆レテ・御骨折・奥・織ツケテ・口惜フ・

収テ・怖ヤ・推尊ムデ・推テ見タレハ・海ノ表ニハ・面白カラフト・人ヨリ後テ・言語ヌハ・稚トキハ・誨ラル・老ヲ・本ノ興ヲ・卑谷ニ下テ・懈ス祈・折柄の如く「ヲ」が用いられ、例外は、折節・大勛功・在スのみである。一方、仮名書きでは、オハシマス・オトサセラレタ・オヨソ半時・助ケオホセテ・チカラオヨハス・浪ハオコラヌ・朱印ヲオシテ・父母ニオクレ・餝ヲオロシ・一日オソナハレハ衆生ノ往生ガ一日オソナハル・オカマレ玉フ・心ノオチツイテアル・オチツカヌニ依テの如く「オ」のみである。

なお「伯父御（一25ウ）と伯父御（一39オ）」や、「折柄（一49ウ）と折節（一16オ）とオリカラ（十二16オ）」、「オノヅト（七14オ）と己（十二4オ）」

特に明確な規範性が存するとは思われないが、或る傾向が見られる。これが、設教・談義の文章表記の特色かどうかは今のところ何とも言えない。

◇促音・撥音・拗音と音便

促音は「ツ」で表記される。

○些トモカヂケル気色ナク（一30オ）
○聖道自力ノ陸地ヲ乗ニ厳スクレタガ（一40ウ）
○見ルニツケテハヒツ、キ聞クニツイテハヒツ、キ（一49オ）
○初メカラ漫爾ニ底ヲ尽シハナサレナンダ（二21オ）
○夫レハモソツト残念ナリ（三2ウ）
○彼ノ立派ナ精進潔斎ノ清僧達ノ目ニハ（三32オ）
○雲ノ上ニ皎然ニ見エワタル処ガ（四5オ）
○御勧化ノ薬デサツハリト離シテシマヘハ（四15ウ）
○袖ノナヒホド引ツリヒツハツテ馳走ニアフハ（十二19ウ）
○切角ツトメテモ退転シテ（十二24オ）
○十一月廿八日午ノ正中マツヒルニ浄土ヘ御還リナサレタ（十三40ウ）

右は用例のすべてではない。なかに僅の例外であるが、

○鍛治屋ノ鎚打チニナテ御座ッタ（三7ウ）
○興福寺ノ衆徒追ッツ、ヒテ（八15ウ）

「ツ」小書きの例が見える。この書は時折「仮名小書き」を見せているが、大部分は「送り仮名」に当るものと見られ、その一類と見た方がよいであろう。

他に後に触れるところであるが、促音便は「無表記」である。

撥音は「ン」又は「ム」で表記される。

○正真ジャト云テ喜ンタ（一21オ）
○羽ヤ白フナルラント云フ御歌ナリ（二2ウ）
○ネンコロニ伝ヘテ給ハレ（二25ウ）
○規矩ヲ御出シナサレタ（四13ウ）
○性根一ッヲ見コムテ（四17ウ）
○一リノ僧ヲ呼デ申スヤウ（四18オ）
○斯書ヲ見聞センモノ（五3ウ）
○是ハ目ノカスムタ過ヂヤ（五16ウ）
○御面貌ヲオガムダ事ガナヒ（五18オ）
○ミクシハカリヲウツサレンニタンヌヘシ（六24オ）
○彼レ是レノ訴訟ゴトモ暫クヤムダ（八12ウ）
○好事聞タト得手ニ組テ（八26オ）
○母ニ別ル、ヤウニ悲シムタ（十3ウ）
○霜アツク侍ルユヘ（十二16ウ）

また、「産セラレタ」（一16ウ）「梅干」（九18ウ）の表記も見られるが、限られた語のみであり、撥音ではない。

「ン」と「ム」との間に特に使い分けがあるとは考えられない

ようである。意志・推量の助動詞は「フ・ン」表記のみで「ム」語形は見当らない。なお、「シム」助動詞は「ス、メシム」（三35ウ）の一例が見られる。

拗音（拗長音）の表記は次の如くである。

漢語の振仮名としては、「大職冠鎌足（一8ウ）・御手段（一11ウ）・金天肅殺ノ気（一20オ）・玄蕃察（一26オ）・太政官（一26ウ）」といった様相である。開拗音も存し、肅のような表記も見られる。一方和語（仮名書き）の面では、

○世間ノ人ニ嫌レシヤウ事ナシニ出家スル族モアル（一27オ）
○向ンノ御礼ニ及ヒマセフソ（一29ウ）
○若シアラハ大勢ノ人損シガ出来ト仰置レテ（三22ウ）
○念仏ヲヒロメウ為ヂヤ（三41オ）
○他カノ信心ヲ説聞サフタメバカリヂヤ（四6オ）
○金ノ鑼ヲケナリフ思ヘトモ（五17ウ）

これらの外、形容詞のウ音便形と動詞のウ音便形が多数見られる。いずれも拗長音の発音を持ったと考えられる。

つづいて**音便**について述べる。用例は一部である。

〈動詞イ音便〉
○是レヲ絵ニ画テミヤレ（一6オ）
○名ガツイタカラハ（二23オ）
○木ニ竹ツヒタ杜撰デモ（五8オ）
○涸渇テシマフ（七2ウ）

〈動詞ウ音便〉
○在昔ヲ慕ッテ（一1ウ）
○膝クミアフテ（一4オ）
○弓ヲ引テ向フタレトモ（一15オ）
○云フタモ云フタ（四35ウ）

なお、「許シ玉ヒタ・サツカリ玉ヒタ」の如く原形も見られる。

〈促音便〉
○上手ナ絵師がアテ（一6オ）
○其ガ手カ、リニナテ（五4オ）
○今ニ京都ニ御逗留アテ（八27オ）
○夢テアタカ現テアタカト（十二13オ）

促音便の語形は、大部分が右の如く無表記であるが、中に

○見ルニツケテハヒツ、キ聞クニツイテハヒツ、キ（一49ウ）
○一塊ノ雲ガ暫時ニハビコツテ天ニ満ル如ク（十8ウ）
○袖ノナヒホド引ツリヒツハツテ馳走ニアフハ（十二19ウ）

右の如く「ツ」表記を採るものも若干ではあるが見られる。

○大キニ異タ（一21オ）○軍サカアリタ（一29ウ）○御存シナカリタ（一46オ）○其レハ穿タ言分（三17オ）○瞋タリ憎タリスルヲ（十9オ）というような原形も数多く見られる。音便形と原形の使用は、ほゞ相半ばという様相である。

〈撥音便〉
○正真ジヤト云テ喜ンタ（一21オ）
○馴シサニ泣テ喜ンダ（四7ウ）
○是ハ目ノカスムタ過ヂヤ（五16ウ）
○御面貌ヲオガムダ事ガナヒ（五18オ）
○ミクシハカリヲウツサレンニアンヌヘシ（六24オ）
○彼レ是レノ訴訟ゴトモ暫クヤムダ（八12ウ）
○好事聞タト得手ニ組テ（八26オ）
○神輿ヲ御所ノ内ヘ舁コムテ（八27オ）
○母ニ別ル、ヤウニ悲シムタ（十3ウ）
○霜アツク侍ルユヘ（十二16ウ）

音便形は「ン」と「ム」との表記をとる。両者の間に差異はな

いようである。原形は見当らない。

〈形容詞ウ音便〉

○幻シニハ天竺ノ天親菩薩アザ〳〵シフ（一2ウ）

○孰モ始メ實シフハ思ハレマヒ（一10オ）

○法ハ貴トフ覚ェマスレトモ（二12ウ）

○心ノ御弟子ラシフナヒ者ハ（四13ウ）

○何トヤラウト〳〵シフナリテ（五1ウ）

右の如く連用形の音便形は多い。ただし原形も見られる。

○蝶ノ多クムラガリ追フテユク（一6ウ）

○身分カ貧ク賤シテ（一10ウ）

○煩シク摩耶夫人ノ胎内ヲカラセラレタソト云（一11オ）

◇変った音表記

〈和語〉

○設バ愚癡ノ尼入道（四20ウ）〈たとへば〉

○イニシヘヨリ解ニクヒ歌（四41オ）〈すむ（四段活用）〉

○ホツコリト意味カワカレニクヒ（四41オ）〈わかる（四段活用）〉

○昼ハ終日（六4オ）〈ひめもす〉

○蕀生テ荒タル宿ノ（七14ウ）〈むぐらおい〉

○安楽房ノ體ヲ江州馬淵ニ送リ（八21オ）〈むくろ〉

右の例中、第二・三例は動詞活用の違いとは考えにくい。また第五例の「生」はハ行転呼音の〈ホ・オ〉混用と見られる。あとの変化は、母音「e→i、u→e、i→e、u→o、u→o」と考えてよいであろう。語を離れて音の面からのみ見れば、「e→i」と「u→e・o」と見うる。

〈漢語〉

○今日登參仕リマシタハ別ノ子細ニアラズ（二6ウ）

或は「当参」の転用か。単に「まゐりました」の宛漢字か。

○誓ヒトハ約束丹誠ダテノ事（四37オ）

「丹誠」か。「誠」に「シヤウ」の音はない。

○タヾ背後ハカリヲオガムデ卒ニ御面貌ヲオガムダ事ガナヒ（五18オ）「面貌」の誤りか。

「御伝鈔演義」の語法

本書の語法的性格を見るに際して、特色を有すると考えられる次の各項ごとに採り上げることとする。

○人称代名詞

○接続詞

○用言及び敬語表現

○助動詞

○助詞

◇人称代名詞

においては、一人称が極めて豊富であり、三人称と見られるものは極めて少数であるが見られる。特徴的なものとしては、「彼尊」などの語形で表わされる特定人物（親鸞上人）を指す用法である。人称代名詞というべきではあろうが、具体的な言語の場がどのように変わろうが、指示される人物が特定であるという点では、一般と異なると見られる。

一人称（傍線の下の（　）内は、傍線語に付られた振仮名）

○我等カ魂ニソミコミ玉ヒタハ（一4ウ）

○我浄土エ往生シタラハ（一10ウ）

○私ソレヲ貰ウケテ（一14ウ）

○妾（ハタクシ）ハ是ヨリ帰マセフカ（一46ウ）

○ヲレカ東隣ニ孔丘ト云男ガアルガ（二8オ）

○煩悩成就ノワレラニハ（三35ウ）

○否妾（ワシ）ガ親ハ卿等デハナヒ（四7ウ）
○僕（ワタクシ）事ハ廬行者ト甲スモノ（四17ウ）
○朕（チン）ガ手ワザニ及ハヌモノハ（四28オ）
○僕（コチ）ガ若シ天幸シタラハ（四35オ）
○拙者カ所存ノ程ヲ御推量アレヨ（五8オ）
○迺公（ヲレ）ガ生テ居ル間ハ（五23ウ）
○弧（ワタクシ）モ年来病身ニ御座レハ（八31オ）
○妾（ワタクシ）ガ前生ハ此近辺（十6オ）
○僕（ワレ）スデニ地獄ノ苦患ヲノガレテ（十19オ）
○時々ハヒトリ己（ヲノレ）ト動揺マスルユヘ（十二4オ）
○此（コチ）ハ清僧ト自慢シテモ（十二8ウ）
○手前ハ存セス（十三33ウ）

なお、外に「我住処・我力・我心・我家・我上人・我望・我身・我教エ・我訓」といった例も多い。以上、一応異なる語形はすべて掲げた。宛漢字の多様さが目立つところである。

二人称

○孔丘ト云男ガアルガ其レガ事デ有ト云タ（二8オ）
○汝ガ教ヘヤウガアチラコチラナレバ（二20オ）
○其方（ソナタ）ニハ雨晴衆人ニスクレ玉フホドニ（三10ウ）
○偖ハ其方（ソナタ）ノ娘デアリタヨ（五11オ）
○否妾ガ親ハ卿等（ソナタシュ）デハナヒ（四7ウ）
○是レ決シテ足下（ソナタ）ノ自作ト聞ヘタ（五7オ）
○家翁（ソナタ）モ段々働ヒテ年モヨラレタ事ヂヤ（五23オ）
○晩ニハ女（ソチ）ト二タリツレテ（五23ウ）
○汝ガ働キヲ識ミントテ（五23ウ）
○汝等（ナンタチ）シラスヤ（六35ウ）

ここで前に述べた「彼尊」の類の例を挙げよう。

○祖師聖人ヲ催促タテ、彼尊ニ御髪ヲ剃セマシタ（一35オ）
○アナタノ御身ニ取テハ成カタヒデハナケレトモ（一48オ）
○彼尊カタハ聖道自力ノ嶮岨艱難イロ〳〵術ナヒ目ヲナサレテ仏ニハナリニクヒト云事ヲヨウ御存シノ上ヂヤ（二9ウ）
○彼方御一人ガ聖道門ノムツカシヒ事ヲ勤テ御ミセナサレタ（二9ウ）
○彼尊御一人ガ叡山ノ霞ノ中ニ廿年ノ御苦労ヲ遂サセラレ甘辛ヲ嘗テミテ（二11オ）
○彼尊ハ弥陀ノ御化身凡人ナラヌ御身ノ上ナレハ（二15ウ）
○グッスリ彼尊ノ家督ニナル（四9オ）
○彼方ノ御胸ヅモリニアル事（六28オ）
○彼方ノ御勧化ニアヅカリテ（六32オ）
○彼方ニ幾千万ノ御心労ヲカケマシタ事ゾ（九37オ）
○一念彼方ヲ頼ミマシタ処ガ（十9オ）
○彼方ノ御在世ヨリモ後バリニ御門下一天四海ニ充テ（十三51オ）

三人称

○那的（アレ）ハ〈以下一丁分欠〉（一11ウ）
○那（カレ）ハ身ノ上ヘヲ三ツ占テモラフテ（三38ウ）
○那（アレ）ハ舞文コト何ニトモスマヌ御仕置哉ト（八22オ）
○イカサマ那的（アノヒト）ニ無心イハフト思ヘハ（十三25オ）

第三例は人ではなく事柄を指す意かも知れない。「那」は中国での用法は「かの・あの」という指事語であり、「的」は人を表わす助辞である。

不定称

○誰（タレ）カ行不退ノ座ヘツカフトイヒテハアルマイ（五28オ）
○誰カ一言ノ出シテガナヒ（五33オ）
○誰（タレ）シモ思ハフケレトモ（六28オ）

◇**接続詞**は異なる語形を掲げるにとどめる。

○深藪ノ奥ニ酒家ガアテ而モ酒家ガ梁ノ辺ニアル（一6オ）

○サテハ竹モ画フシ橋モ画フガ（一6オ）

○シカシナガラ癖ヂヤホドニヨイハト云テ（一23ウ）

○ソレカラ思ヒ〳〵ニ戒壇ニ登テ（一36ウ）

○爰（ココニ）空海祈請シテ念スラク（一43ウ）

○妾ハ是ヨリ帰マセフカシカシ登山イタシタラバ（一46ウ）

○歓喜ノ涙袖ニアマリ然ハ明日参詣仕ルデ御座ラフ（二6オ）

○實ニ冥加ナヒ事ヂヤソレテ法然上人ハ（二9オ）

○痩衰テ骨ヲ折加之（ソレハカリカ）馬ノ背ヲ疲シ（二10ウ）

○御演説ナサレタスレハ如来ヲ頼テモ（二32オ）

○一念テナケレバナラヌ然トコロニ当流ノ御勧化（二32オ）

○誦ジ覚タ人カアラハ其人ヲ我夫ニセフト云ソコデ青年者ドモガドウゾシテ諳誦ゾト（三10オ）

○怖シフナルサテ能ク見ルホド目鼻モアリ（四14ウ）

○尤至極ニ存スルサリナカラモソツト御思按ガ足ヌカ（五7ウ）

○誰シモ思ハレフケレトモ夫ハ凡夫ノ膚浅料簡（六28オ）

○上人ノ御酬ニサレバトヨ舟ニノリ風波ハヨシ（八39オ）

○聖人ノ御返答ニサレバトヨ我今関東ヲステ、（十二11オ）

○於是（ソコテ）権現三国ノ七高僧ヲ呼出シ（十三33ウ）

◇**用言及び敬語表現**

活用形のうち**終止連体形**、即ち連体形が終止形の用法を兼ねる傾向は、次の通り顕著である。

○無上涅槃ノ妙果ヲ得セシメ下サル、（一1ウ）

○末ニナルホト御繁昌ナサル、（一20ウ）

○先ッ以テ法容萬福珍重ニ存ズル（二5ウ）

○聴者ノ旨ハサマ〳〵ニワカル、（二20ウ）

○余所ノ宗旨ノ人サヘモ言（マフサ）ル、（三30ウ）

命令形には、「旅サセイ」「入レヨ」「聞サレヨ」「斯来レ」「タシナマレヨ」「マケヤ」「取リナサレヨ」などが見られる。禁止には、「シラスナ」「遣ナ」「スナ」の形が多い。

つぎに**二段動詞の一段化**の傾向は十分に見られる。

春ヲ迎ルホドイトゞ白ナル（一26ウ）

信スレハ迎エルゾト待受下サル、（四38オ）

弟子ヲ教ルニハイロ〳〵アリサウナ事ヂヤガ（二20オ）

猟ハ鳥カ教ルト云諺ト同シ道理ジヤ（三15ウ）

左ホド我ニ別ル、事ヲ悲ムカ（十3ウ）

已今当ノ三世ノ往生早ヒ晩ヒガワカレル（九36ウ）

右のものは、同じ語が二段一段の両活用を採る例である。他に〈二段活用をするもの〉

下サル、・キコユル・ナサル、・消レドモ・聞ユレドモ・用ユル・助クル・称フル・カロシムル・ト、ナフルなど。

〈一段活用をするもの〉

会得カネル・北トキハ・サシカケル・ワスレル・試ルニハ・行キカネル・フリステル・清ル・育テル・欠ル・ス、メル・見エル・オチル・ツカヘル・背タ・ステルなど。

サ変動詞には、単独、漢語につく、和語につく種別がある。

○蟻ノ心デハ食椀デ喰人間ノ話ヲシタラハ合点ハセマヒ（三8オ）

○彼老女色チガヘヲシドレト云テ上着ノ裾ヲ取テ（二26オ）

○ヨイト云テ自慢ヲスナワルイト云テ辞退ヲスナ（四23ウ）

○瞋恚ノ瞋タリ憎タリスルヲ腹ガ立ット云（十9オ）

○凡夫ガ愁ニスレハナル事勤メタラハ出来サウナモノヂヤ（三22ウ）

○設アルニモセヨ若シアラハ大勢ノ人損シガ出来ト（三22ウ）

漢語に合体したサ変動詞・和語に付いたサ変動詞は、次の如くである。

卑下スル・辞退スル・報スル・存ズル・案シナ・合点セマヒ・念ゼヨ・信スレハ・発スルナ・信スルニ・判ジル・滅亡シ・銘ズル・安堵スル・現在シテ・氓没シテ・翻訳シテ・應同シテ・署シテ・至極シなど。

色チガヘシテ・夜行スナ・タツトヒス・手ホメスル　など。[註14]

可能表現では、下一段活用の可能動詞が多く見られる。外には「得」と「出来ル」が目に付く。

○弥陀ノ御化身ト云事カ知レタニ（一18ウ）

○御開山ノ功勲ハシレタ（三32オ）「知レル」は例が多い。

○店ニヨリツク者ニハ猶対ニナレル（七12オ）

○法然上人ヘ弓ノ引レヌヤウニ成ッテ（八12ウ）

○御手ノウチニハタヽミガ八畳シケルゲナナト、（十13オ）

○始メ二ッハ守リタレトモ後ノ一ツガ成(イケ)ナンダユヘ（十二43ウ）

○国處ヲ擇ハスドコデモツカヘルト云事（十三6ウ）

○賤モノモ貴モノモ買ル（十三6ウ）

○喜ヲヤウニナリエタハ……御蔭ニテマシマス（二28オ）

○佛ニナシエテ下サルヽガ（四10ウ）

○ナカ〳〵容易通リエラレヌホドノ険阻（十二12オ）

○敵国ヲ亡スホトノ手柄カ出来タ（一30オ）

○久シフリデノ対面カ出来ルテアラフ（一38ウ）

○生質ガ頑魯ナニ由テ人事モ出来ス（五4ウ）

補助動詞では、置ク・呉レル・了フ・ヤルが見られる。

○未盡理ナ事ハ且ク除テ置テ今近ヒ譬デ申サフ（七9ウ）

○ナルホド其ハヨウ云テクレタサリナガラ（五22オ）

○日ゴロノ修行ハ崩レテシマフ（五26オ）

○見アヒガウニ殺シテ仕舞ヘトモ（十二19オ）

○頼ム者ヲ秖今佛ニナシテヤルゾト（九19ウ）

ついで**敬語表現**を見ると、「御……ナサル」「ナサル」が最も多い。各一例を挙げるに止める。

○證據ノ為ニ遺置ソト御意ナサレタトアル（一13オ）

○三返ヅヽ唱ヘテ禮拜ナサレ遂ク出来アガラセラレタ（四11ウ）

この他に、次のようなものが目につく。

○拙者カ所存ノ程ヲ御推量アレヨ（五8オ）

○御繁昌ナサルベキ事ヲ預テヨリ御存ジシラレ（六31オ）

○何トゾ一句ノ法門ヲ仰セラレ下サレナハ（八31オ）

○法然上人ヲ御慕ヒアラセラレテノ御詠ト聞エタ（九6ウ）

○我レ一ト馳アツマリテ御対面申サレタ（十二31ウ）

○御勘気御免（コメン）ナシ下サレタキ由（十三38オ）

○指当リテ上人ハイカヾ遊バサレテ御座ナサルヽ事ゾ（八16ウ）

他に「賜ル」「思シ食ス」「遊バス」「オホセラル」「マシマス」などの本来敬意を有する動詞、「下サル」「イタス」「申ス」「奉ル」など補助動詞、「侍」「候」の丁寧語、および助動詞の「る・らる・れる・られる」「す・さす」「せる・させる」などが用いられている。なお、次の「ヤル」も弱い敬意を表わすと見られる。

○是レヲ絵ニ画テミヤレト云タ（一6オ）

○七人ノ衆此レ出ヤレ（十三33ウ）

形容詞と**形容動詞**について特色を記す。

○コレガ取リ分アリガタヒ（一20ウ）

○春ヲ迎フルホドイトヾ白ナル（一26ウ）

○親ノ懐ニ在テ痛痒（イタイカユイ）ヲシラスニ育モノハ（二9オ）

○一処ニ御座ナサル、ハモノウルサク御退屈ニ思召ス（十二35オ）
○在處ハ近シト急トコロニ（三37オ）
○市中チカキ此ノ処ニト申玉ヘハ（四11ウ）
○サラ〳〵足下ヲ讒奏イタステハナカリタ（五8オ）
○一文ニマケヤト讐直ハ憎（ニク）ケレドモ（七17オ）

右のように、活用形に両形が見られるが、口語活用形の方が多いようである。注目すべきものに次の二例がある。

○或ハ苦シミ或ハ楽シイロ〳〵ノ事ニアヘトモ（十二33ウ）
○門弟衆ノ事問ヒ来ルモ六ツカシ、トテ（十三37オ）

さきの例は「楽シミ」の誤刻かとも考えられるが、ともあれ、この時期の用法としては珍らしい。

形容動詞としては次のような例がみられる。

○晴ナ座敷テ此間ハ米カ翔貴テナンド云ハ（一16ウ）
○鑓ヲ取ハ地ニオトス甚タ不便（フマハリ）ナ処ヲ（一30オ）
○世間並ノ私ハ愚ニゴザル（四12ウ）
○是ハ珍（チン）ナ事ヂヤト云テ家内ハ悦フ（七4ウ）
○斯シタ手バヤナ御利益カマシマスユヘ（七25ウ）

◇**助動詞**　文語助動詞と口語助動詞が混在する。各語用例は一二にとどめる。（各語の次の「多」は「多数」、「少」は少数、数字は限られた用例数を示す）

○ス　多　思ヒツカセラレタ　アラセラレタ
○サス　多　喩ヘサセラレタ　出カケサスルテ有フガ
○シム　3　妙果ヲ得セシメ下サル、　弘誓ヲスヽメシム
○ヌ　6　閉テヤミニケリ　滅亡シナントス　タンヌベシ
○タリ　多　思レタラハ　形ニ止リタレハ
○リ　1　今ト符合セリト
○キ　8　放シガ　京ヘ上リシ後ハ
○ケリ　4　賛ヌ者コソナカリケリ　教ヘ玉フト見ヘケルガ
○ン　多　信ゼン人ハ　マイリタク候ハンニハ
○ウズ　2　対面ナサレウズト　聴聞シタデモ有フズレトモ
○ジ　2　オノレ遺ジト　取レジト用心シテ
○マシ　1　アヤシク候ヒナマシ
○マジ　2　左称ノキビシヒ事ハアルマジヒヤウニ思ヘトモ参ルマジヒ我等ガ浄土ヘ参ル
○ラン　1　タヽサキノ羽ヤ白ァナルラン
○ヤラン　1　煩悩ノナキヤラント
○ラク　1　祈禱シテ念スラク
○ナリ　多　取リ放フナラハ　證據ナリ　大雪ナレドモ
○タシ　6　結ハセタク思フカラ　アラセラレタキ由
○如シ　多　カキケス如クニ　我等如キハ
○ベシ　多　老若ニヨルヘカラス　立チノクベシ
○ベカカリ　4　ヤハリ時ニ合セテアリヘカヽリ　唯アリベカヽリノ侭垢離モトラス
○レル　多　御制作アラレ　思ハレマヒ　射殺レテ
○ラレル　多　宿セラレタ　素懐ガトゲラルヽ　賛ラレタ言
○タ　多　成テ在シタ　見コムダト覚エマシタガ　沈タ時
○ウ　多　困フト　佛ニナサフゾト
○ヨウ　2　カクシテ居ヤウヨリハ　極楽テ得ヤウト思フテ
○ズ　多　シラヌ人　底モシレネハ涯モシレヌ
○イデ　1　イハヒデモシレタ
○ナンダ　多　思ハナンダガ　見エサセラレナンダレトモ
○マイ　少　思ハレマヒ　供ガナルマヒホドニ
○タイ　3　癖付タイハ　徳色ガシタフナル
○ヤウダ　多　思ヒシルヤウニナル　飯ニセフト云ヤウナモノデ

取リジメガナヒヤウナレトトモ
○サウダ　少　同ジ事デアリサウナモノ　妖物ヂヤサフナト怖シフナル
○マス　多　覚エマシタカ　及ヒマセフゾ　心ヲ尽シマスレトモ
○タガル　1　牆ヤブリヲイヒタガル
○ヤル　2　画テミヤレ　此ヘ出ヤレ
○ゲ　3　馬ガ亡タゲニ御産ル　人ニ問ハレタゲナ
○ケレ　註15　3　心地モセフケレ　考コソ悪モセフケレ
○ヂヤ　多　助ル事ヂヤ程ニ　正夢ト云モノジヤ
打消の「ナイ」と断定の「ダ」は用例を見ないようである。

◇助詞

格助詞・接続助詞・副助詞・終助詞・並立助詞・準体助詞・係助詞が見られる。

〈格助詞〉「ガ・ノ・ヲ・ニ・ト・ヘ」は用例を省く。

デ　○始メハ獵師デアリタ（一33オ）
カラ　○海中カラ何物ゾ見コムダト（一13ウ）
マデ　○最前厳テ差シ上タマデハ隨分ロヲアイテ（三13オ）

〈接続助詞〉「トモ・ドモ・テ・ガ・バ・ヲ」は用例を省く。

カラ　○済度シ初メハヤト思食スカラ父母ヲ頼テ（一11オ）
カラガ　○タカデ義理ヲ缺テカラガ陰デ誚ラル、ハカリ（五11オ）
カラハ　○自力ト名カツイタカラハ何レモ断悪證理シテ（二23オ）
ニ　○ドフシテ除ク　ゾト云ニ観音様ノ御世話ニナテ（二32オ）
ナガラ　○時ハ春ト云ナカライマダ余寒ノハゲシキ折柄（二1オ）
○右ノ人々コハ〳〵ナカラ手ニ受取ルト思ヘバ（二15ウ）
シテ　○身分カ貧ク賤シテ人ノ目下タニ見ラレ（一10ウ）
シ　○竹モ画フシ橋モ画フガ（一6オ）
ト　○獵師モ其レヲミルト頻リニ心ガシホレ（一33ウ）
トテ　○何ボウ掌珠チヤホドニトテ親ノ恩ヲ知ネハ（二9ウ）
ユヘ　○告ヲ蒙リマシタユヘ今日推参仕リマシタ（二7オ）
ノデ　○仰セラレタノデ信心ガ正ヂヤト云事ガ知レタ（四24オ）
ニ依テ　○アマリ鄙俚ニ依テ八木ガ高直デナド、云（一19ウ）
程ニ　○安堵シタ如クヂヤホドニ其ヲ決定シ（二34オ）
候間　○出家ヲ望ミ候間何トソ許シ玉ハレ（一37ウ）
ケレトモ　○誰シモ思ハレフケレトモ夫ハ凡夫ノ膚浅料簡（六28オ）

〈副助詞〉「カ・ゾ・ハ・モ」は用例を省く。

サヘ　○同シ迷ノ中テサヘ大キヒ小サヒノカハリカアル（三7オ）
バカリ　○識タハカリテ生死ノ迷ハ離レラレヌト（二2ウ）
タケ　○足ノツヾクタケ古郷ノ方ヘトイソグ処ニ（十二22ウ）
ダケ　○信心モソレ〳〵ノ智恵ダケニカハル（六14ウ）
ヤラ　○何トヤラ劣ルヤウニ思ハレマスル（六12オ）
バシ　○悪ヒ事トバシ思ハネトモ（六21オ）
シモ　○誰シモ思ハレフケレトモ（六28オ）
デモ　○御安心ニ秘事口訳デモアル事カ（四17オ）
シテ　○我身ノ志ヲ得ヌカラシテ人ヲカコチ（二2オ）

〈終助詞〉、

カシ　○親ノ後ヲツヽケシト（五4ウ）
ガナ　○吉事ノ端デガナ御座ラフト（七4ウ）
ナ　○御影チヤトハ思フナ（一13オ）
バヤ　○初メハヤト思食スカラ（一11オ）
モノ　○御宗旨御取立ト云モノ然レハ（七1ウ）
モノカ　○西国マデモ行フモノカ（三44オ）
モノヲ　○華ヲヤラフモノヲト思レタラハ（一11オ）

ヤ　○助ケタヤト思召ス御慈悲ノ御勧化（五4ウ）
ヨ　○偖ハ其方ノ娘デアリタヨ然ラハ先ツ墓所ヘ（三11オ）
ハ　○アトモドリヲセヌバカリノ事ヂヤト見ラレタハ（二30オ）
ゾ　○何ノ御礼ニ及ヒマセフゾ（一29ウ）

〈並立助詞〉

○助ラフカ助カルマイカト（二33ウ）
○咽ノカハクト腹ノヒダルヒトニ堪カネタレハ（五14ウ）
○爪ツ摩ツイロ〳〵ノ善巧方便デ（十二15ウ）
○善ノ悪ノト分ノアルハ自力ヲ運聖道門（三41オ）
○狭モナリ又広大ニモナル（一29オ）
○瞋タリ僧タリスルヲ（十9オ）
○浴室ニデモ入リ行水デモシテ身ヲ清ル（四14オ）
○壁ノ中ヘ塗コメナリトモ又ハ地ニ埋ミナリトモナサレテ（五2ウ）
○念佛申ス事カ恥ヒヤラ数珠モツ事ガ人ト目ワルイヤラ（一32ウ）

〈準体助詞〉

○短イノハ五年（四10ウ）　○出家シタノヲ禿人ト云テ（四13ウ）
○其ガ即チ私ノアルノヂヤ（十三9オ）

〈係助詞〉

○御イソキナサレタコソ道理ナレ（一39オ）
○賛ヌ者コソナカリケリ（一42ウ）
○如来ノ大悲ガ一度々々ニ薫ジツカセラル、ニ由テトコソノ程デハアリガタヒ心ニナル（七17ウ）

助詞の中で、江戸語に特徴的に見られる上接語との間に起る音融合の現象は全く見られない。打消助動詞「ナイ」や断定の助動詞「ダ」の使用が見られないことを併せ考えてみるならば、全体として強い保守的な上方系の言語であると言いえようか。

「御伝鈔演義」の語彙

本書は漢字カタ仮名交り文である。和語は仮名書き、漢語・仏語は漢字表語がもっとも一般的である。漢字表記の中、約三割程度のものに振仮名が付けられている。振仮名にはその漢語の音や訓と普通に考えられているものが付けられている。ただ中には、右旁に音、左旁に訓と両側に付いているものも若干見られる。また「訓」という範囲に入れてよいかとも思われるが、例えば、官道・逋逸などのように所謂「白話小説翻訳書」の中によく見られる性質のものがある。これらの語の表記を見ると、高座からの説教・談義の実態から離れ、眼で見る際の興味・教養を重点に置いたものと考えざるを得ず、談義本の内容が、「語られた」言語の実態を示しているとは単純に言えないのではないかと考えられる。

以下、紙数に余裕がないので目ぼしいものを掲げる。

㋐天下同（五22ウ）対機（一45ウ・六14ウ・七20ウ）対枧（四13オ）賣買ゴト（五4ウ）商店（七15オ）悪性モノ（十三18オ）飽果（三32ウ）浅膚料簡（六28オ）首カラ（四8ウ・七22ウ）アチラコチラ（二20オ）後バリニ（十三51オ）穴賢々々（十三47ウ）不肖（七19ウ）白痴ナ（九13ウ）洗物屋（二19ウ）アリアガル（九15ウ）アリソウナ（一20ウ）嬉戯（十16オ）アリ様（九29オ）アルナシデ（五14オ）有無ニ（四41オ）雨晴（三10ウ）

㋑イヒサマス（五3ウ）イヒテ（五28オ）異学異見（五3ウ）如何躰（八33ウ）イカナ〳〵（五21ウ）息スヂ張（六6ウ）意楽（十17オ）活如来（六22ウ）缺唇（十二26オ）イソナリ（八19ウ）一倍ス（四9ウ）一番口チ（三30ウ）市中（四11ウ）一刻ハカヤリナ（十14オ）一統ニ（八15ウ）飯縄（十二34ウ）東野人（十13オ・16ウ）群狗（七27ウ）位牌知行（四8ウ）今ガ今ニ（五21ウ）色チガヘ（二26オ・三13オ）色目

（二31オ）音物（十3オ）
㋒高貴（六15オ）浮世逗留（四23オ）請合人（十三22オ）ウサル（六12オ）黷貨（五20ウ）訐テ（七16ウ）瞠若（六36ウ）打ツブス（六5ウ）精微キ（四10ウ）而還（七28ウ）ウト〳〵シフ（五1ウ・九27オ）負廊（十10ウ）售口（十二26オ）鱗蟲（十二20ウ）上官（十三25オ）
㋓依怙贔屓（六9ウ）得手ニ組ム（八26オ）襟ニツク（十14ウ）演説ス（十二7オ・25オ）
㋔官道（二17ウ）徳色（六1ウ）亡八的（四36ウ）應同ス（十三45オ）王法ゴカシ（八26オ）大袱子（五22ウ）御庇（四10ウ）大庇（九13オ）オガミツケル（六7ウ）傍観（十三26オ）法令（六9ウ）蹟（一40オ）長百姓（十二40オ）強盗撞賊（二26ウ）押コミニ（六14ウ）靳秘〈オシム〉（五2ウ）謫居（九12ウ）左右（九21ウ）褻衣（三2ウ）諳ゾ（三10オ）御身ブリ（十二10オ）オメ〳〵ト（四32ウ）正ギヤ（四24オ）親厮（七15オ）老父（二8オ）及ヒタヘル（六7ウ）オリ見舞（十三25オ）迺公（五23ウ）

〈ヘ〉内は左旁に付けた振仮名。以下同じ〉

㋕苟且（十三39オ）牆ヤブリ（八5オ）カケ合ス（四22オ）逋逸（十三18オ）欠目（十三24ウ）カコチガマシ（八22ウ）カサビクナ（五5ウ）カジケル（一29オ）黠慧（六15ウ）鍛冶屋ノ二蔵（三7ウ）僻地（五21ウ）頑魯（五4ウ・九13ウ）偏チニ（四26ウ）偏聴訟ナ（八22オ）我他彼此（六5オ）不成人（一5ウ）カツフツ（四39オ）門並ニ（十二44オ）戸ナラビ（七15オ）銀券（七18ウ）豪家〈カネモチ〉（十6オ）輦轂下（五21ウ）肭（七20ウ）苟且ナ（三18オ）涸渇テ（七2ウ）
㋖奇異殊特（十三51オ）聴ナシデ（四17オ）樵者芻蕘（九15ウ）気盛モノ（十二9ウ）気色（九20オ）気ズミ（十三30ウ）キツイ（二21オ・十二19オ）精粋（七24オ）屹ト（六9ウ・七14オ）肝ニ銘ズ（八13ウ）九尋無底ノ沢（十5ウ）恭敬イタス（六22ウ）其時ギリ（一44ウ）義理ヲツケル（四41オ）器量（六14ウ）キレカハリ（二21オ）靳秘ス（五2ウ）
㋗杭（四14ウ）敗種（十二26オ）グズ〳〵ト（二3ウ）僻法門（八2オ）グツスリ（四9オ）クラガリ法義（七17オ）グル〳〵ト（三10ウ）グワラリト（八15ウ）
㋘不堪捧腹（四18ウ）舞文（八22オ）決シテ（五7オ）ケナリフ（五17ウ）僻令（五23オ）現在ス（十4オ）現量コト（七20ウ）顯露（七16ウ）
㋙乞セタゲル（一32ウ）懸官（六9ウ）好味ナ（三14オ）心ズミ（十三1ウ）小智ヒ（六15ウ）杜撰（五8オ）腰ノスエ処（十三4オ）御酬（八39オ）骨髄（九15オ）骨張スル（八3オ）コト〳〵シ（一9ウ・十二29オ）事ノ極リ（四15ウ）コナシ貶メン（八5オ）御免アル（九20オ）御面貌（五18オ）御物躰（十16オ）是端ノ事（一29ウ）コハイ（十二19ウ）根機ヲ尽ス（三10オ）根ノ利鈍（六14ウ）
㋚サシモグサ（九3ウ）サシコミ（九2オ）サツパリ（七2ウ）サバク（六6ウ）様ツケ（五15オ）區々（六13オ）覚了タ（十28ウ）サラ〳〵（五8オ）去リトハ（四6オ・六2オ）童（五13ウ）狙同前ノ者（九15ウ）サレバトヨ（八39オ・十二11オ）三枚敷（三7オ・四20ウ・五17オ・十10ウ）
㋛天幸（四35オ）文法（六28ウ）仕落（六18ウ）猙獰タ（十二15オ）シガミ咀（七27ウ）色衣（十16ウ）至極ス（五8オ）業（五24オ）産業片手ニ（六4オ）山民野処（九15ウ）舌ヲマク（六11ウ）下タ々（六15オ）シツカリト（一14ウ）屬纊（五29オ）少頃（一14オ）闍維（十三44ウ）入魂（四41オ）從類（九11オ）殊勝出立（九15オ）出世口（五15オ）術ナサニ（四36オ）正嫡（十二7ウ）承上起下（一26ウ）障難（八14ウ）精爽（一13オ）昇平ノ御世（六35ウ）上来（三42ウ）所詮（八8オ・十二24オ）所談ナル（七17オ）辞退（四23ウ）狼顧ニカケ（一23ウ）素人好（七22ウ）醎（九18ウ）信行両座（五25オ）神在餅（十二13ウ）

㋜スウ〳〵デ（六8ウ）スカス（一31ウ）助ヲサス（四22オ）スゲナフ（十三26オ）理目（二21ウ）坐ニ（八14オ）根敗（九15ウ）幾乎ニ（五23オ）ズフ〳〵ト（一13ウ）頭北面西（九30ウ）解ニクヒ（四41オ）曲尺（十23ウ）スマシタ様デ（十二38ウ）寸々ニ（一33ウ）ズンド（五13オ）

㋝省署（九38オ）セキセバフ（五2ウ）世間ゴト（十三38ウ）世間上手（九14ウ）世間モ広フナル（十3オ）鼠竊（二26ウ）催促タテ（一35ウ）絶世独立ノ美人（八13オ）切々（十三25オ）窮巷（十10ウ）湫溢シ（九12ウ）センゲリ〳〵（十二34オ）善巧方便（十二15ウ）善哉モチ（十二13ウ）漸々ニ（七7ウ）千万（六18オ）

㋞造作ナ（五5ウ）總々（一2オ・6オ・7ウ）滄溟海（八19ウ）粟散片州（九27ウ）為人（四7ウ）ソミコミ（一4ウ）ソミ〳〵ト（一7オ・五15ウ）夫レナリニ（七19ウ）加之（二10ウ）自爾以来（十三36オ）其地某処（一35オ・三25ウ）

㋟大躰（四8ウ）極ガ（七20ウ）高テ（九15ウ）出シ手（五33オ）タヾアリニ（十三27オ）タヽサキノ羽（二2ウ）孩提（五13ウ）タツトヒス（五9ウ）華美（三5ウ）任侠（十三29オ）楯ニツク（十三29ウ）即令（四15オ・七22オ）賴ミヅメ（六9オ）茶毘（十三44ウ）諏キリニ（四22ウ）タマダスキテ（四19ウ）誘ル者ダラケデ（四6オ）タラス（一31ウ）誘シコム（十三18オ）丹誠ダテ（四37オ・37ウ）

㋠近フイフ（四8ウ）宛ド（三15ウ）猶若（七3オ）些ト（三7オ・六5オ）旁午（五2ウ）朕（四28オ）珍ナ（七4ウ）

㋡ツガモナヒ（九1ウ）ツギ〳〵ノ（一23オ）居諸（九21ウ）ツヾマルトコロ（六9ウ）尋常（三7オ）襁（二34オ）艶ラシイ（十三46オ）ツラ〳〵ト（三21オ）羅縷（十三51ウ）鈎鬼（三29ウ）

㋢凡夫底（七18ウ）如何躰ノ（八33ウ）出カス（四30ウ）手ガトヾク（八24ウ）手ツヨフ（十三7ウ）手バヤナ（二23ウ・七25ウ）手寛ノ（二17ウ）手ホメ（九14ウ）規矩（十22ウ）標準〈テホン〉（十22ウ）出見世（十三21ウ）手ワザ（七14オ）天魔波旬（七14ウ）

㋣東関（六27オ）百計シテ（十16ウ）同行仲真（十三9オ）登参（二6ウ）堂上堂下（八15ウ）稲麻竹葦（十三29ウ）十分（二27ウ）殿ツケ（五15オ）嚢沙（七2ウ）迭噬ノ（六36ウ）蕩ス（五4オ）トリアフ（四40オ）取リジメ（三29オ）

㋤猶サラ（六9ウ）曠日弥久（九37オ）隠語アゲル（五34オ）隠語ガケ（五34オ）菜摘水汲（六15オ）鉛刀（七22オ）ナマシ井（九36ウ）ナマモノジリ（八5オ）ナミ〳〵ニ（四17オ）ナリ（七18オ）ナルホド（五7ウ）ナンボウ（三37ウ・七28ウ）汝等（六35ウ）

㋥贋紫（二33オ）二蔵（三7ウ）二段（九13オ・十14ウ）微笑ト（四18ウ）日本一州（八23オ）二枚敷（五17オ）風波（八39オ）日和（十二14ウ）任運（十三31ウ・42ウ）

㋦ネカラ（一22ウ）讐直（七17オ）

㋧擯出（六18オ）進退ナラヌ（三21ウ）会得（一1ウ）

㋨廃人（七14オ）廃退（七14オ）妖物・妖怪・鬼魅（四14ウ・25オ・25ウ）箱グルミ（二27オ）漫尓（三29オ）缺鼻（十二26オ）口實（九29ウ）鼻ニアテル（三25オ）鼻モチナラヌ（九14ウ）揜腕（十二26ウ）隠語（六13ウ）

㋩太危ニ（十二42ウ）不利ヲ取ル（八6ウ）引ツリヒツハル（十二19ウ）人情（三44ウ・十14ウ）人ギレ（四25オ）人事（五4ウ）他マシ（十三23オ）ヒトリユキ（五23ウ）標準（十22ウ）不祥ナ（七3オ）鄙俚・俚語（一19ウ・二27オ・四35ウ）ヒロ〳〵スル（二27ウ）

㋪分限者（五22ウ）憐懶（十二39オ）不浄場（十三23オ）未盡理ナ（七9ウ）不図（十二7ウ）掌珠（二9ウ）不便ナ（一30オ）フリハナシ（三20ウ）フル〳〵（三2ウ）規子（十23ウ）

㋫ホツコリト（四41オ）骨目（五9オ・八32ウ）氓沒〈ホロブル〉（十21オ）飜邪帰正（十22ウ）焚燒（十三44ウ）飜訳ス（十三44ウ）

㋬舞ノキ（一44ウ）實シフ（一10オ）マザ〳〵シ（一2ウ・十二13オ）

マザ〳〵ト（六16ウ）耿々ト（六3オ）今少ト（十三22オ）皓首（一26オ）マチ〳〵デ（十25オ）真侶（六27ウ）丸ニ（三31ウ・四25オ）マハリヒヅメ（三35オ）真正（三26オ・七17ウ）

ミ　見アヒガウニ（十二19オ）能（三24ウ）見ザメ（二33オ）東道（六35ウ）道バカユク（九34オ）三輪（十二9オ）骨髄（八32オ）身持タ（十二40オ）氓沒ス（十21オ）

ム　無疵ナ（十二41オ）ムサト（四40オ）ムズ折（一5オ）寃死（六28ウ）胸ヅモリ（六28オ）

メ　冥眦（十三23ウ）眼力（四30オ）萠（一30ウ）漫爾ニ・妄（二21オ・七5オ・16ウ・十二25ウ・七17オ・21ウ）

モ　體（八21オ）モソツト（三2ウ・37オ・九12ウ）黙止ガタシ（八33ウ）持チ合ヒ（四22オ）物体（一10オ）不羈モノ（四14オ）モトダテ（六31オ）モトツキトコロ（五25オ）望姓（五24オ）本質（八25ウ）言語ヌ（一22ウ）モミツケホド（五13ウ）

ヤ行　ヤシハ孫（一9オ）痩我ヲ張（十二44オ）ヤツト優デ（三23オ）努力々々（十三23ウ）ユリスワル（三17ウ・十三13ウ）微白（十三18オ）横手ヲ打（一6ウ）ヨシ〳〵ト（六4オ）余所見（十23ウ・十三14ウ）世トリノ亭主（九29ウ）夜ヌケ（四19ウ）

ラ行　絡繹（八13オ）埼明（二23ウ）利口ナ（七9ウ）利鈍（六14ウ）吉ナ事（七4ウ）

ワ行　青年者・妙年的（三10オ・五16ウ）ワケ合（十25オ）孤（八31オ）ワルサ（一22ウ）ワルナシニ（四30オ）ワル〳〵ヒ（一3オ）我一ニ（九27オ・29ウ・十二31ウ）

次いで、慣用句と見られるものをあげる。

アキタリノナヒ（一8オ）アルマヒモノデナヒ（三37ウ・十二45オ）云フタモ云フタ切リノコト（四35ウ）一句モアガラヌ（六5ウ）カレコレスルウチ（三10ウ）木ニ竹ツヒダ（五8オ）舌ノ根ノマハル間タ（四36ウ）取リモナヲサス（三6オ）取テモツカヌ（八39オ）左之右之（九2オ）似テモ付ヌ（四7ウ）ナキニシモアラス（六24ウ）逃ゴトハ逃タレトモ（八17オ）引モチギラズ（八13オ・十13ウ）人ノ目ヲヌク（十二34ウ）夜ニ日ニツイデ（七20オ）

最後に諺を掲げる。

親ハ泣寄（一11オ）因ナヒ品玉ハトレヌ（一31ウ）カル時ノ地蔵貌カヘス時ノ餤魔貌（一32ウ）誓願寺ノ小僧ニ餅賣ルナ（二24ウ）蟹ハ甲ニ侶テ穴ヲホリ心ホドナ世ヲ経（三7オ）葬ヤ嫁（三10ウ）猟ハ鳥カ教エル（三15ウ）砂ヲ蒸テ飯ニスル（三22オ）三人ヨレハ文殊ノ智恵（三33ウ）心ハ面ノ如ク貴ヒ寺ハ門カラ（四3オ）昨日ヤ今日ノ新参（四20ウ）支木ツヨフテ家仆ス（四21ウ）尾結ハヌ絲デ物ヌフ（四24ウ）難波ノ葦ハ伊勢ノ濱荻（四26オ）鹿ノ角ヲ蜂ノ螫（四32オ）大佛ノ柱ヲ蟻ガセヽル（四32オ）瞞スニ手ナシ（五24オ）異門ノ鑰（六7オ）鴈ガ飛ヘハ石亀ガジダンダ（七18ウ）猫ニ小判（七20ウ）牛ニ麝香（七20ウ）ナマ兵法大創ノ基トナル（七31オ）獅子身中ノ蟲（八3オ）七重ノ膝ヲ八重ニ折（八6ウ）針ホドノ孔カラ棒ホドノ風カ入ル（十27ウ）当世ハ馬鐙フンバリカネカリニ（十二19ウ）破タ石ノ再タビイエアハヌ（十二26オ）

おわりに

多量に存する真宗談義本の中、智洞・義圭の両者に限っても、随分な分量の資料が存在する。いま、その中の一冊を取り上げて一応の調査を行ってみた結果を報告したのであるが、記した特色らしいものが、義圭のそれか、真宗談義本のそれであるか、又は心学道話にも共通するものか等、本来検討すべきことがらであるが、日時の切迫により今回は一書のみの調査に終始した。今後対象を拡げてゆく際の目安にと考えての報告である。

註1　小学館刊「日本国語大辞典」の「談義」の項の記述。

註2　「国語学研究事典」の「滑稽本」や「心学」の項の記述。

註3　高羽五郎氏によって、一九八三・十二月以来復刻が続けられ現在「真宗談義本小系十」が刊行され、近刊予告に「御伝鈔演義」が掲げられている。

註4　中村幸彦氏。雑誌国語学87集、昭46。「近世語彙の資料について」氏の分類による第五群として〝近世の各宗派で、殊に盛んであった仏教の説教説法〟をあげている。

註5　澄憲（一一二六～一二〇二）とその子聖覚（一一六七～一二三五）の流れを安居院流。定円創始の流れを三井寺派。親鸞は、聖覚の著「唯信鈔」の注釈「唯信鈔文意」を著して之を奨めている。

註6　一説には、浄瑠璃作者菅専助と同一人物とも云われる。

註7　鷲尾順敬著「日本仏家人名辞典」に〝諦住（タイジュー）近江響忍寺の学僧なり。諦住字は義圭と云ふ。近江膳所響忍寺に生る。（中略）寛政十一年五月十日寂す。寿缺く。〟（下略）とある。

註8　此所までに掲げた著書二十点（巻数を()で示した）は、「日本仏家人名辞典」にあるところである。以下補足した十二点の著書及び先きに菅原智洞の著書として掲げたものは岩波新書「説教の歴史」関山和夫著による。また、最後の二点（巻数指示）は、高羽五郎氏刊の「真宗談義本小系」による。

註9　岩波の「国書総目録」によれば、永仁三年成立とし、写本刊本多数にのぼり、書名も幾多の異種が存する。親鸞の伝記絵巻である。本書から絵を抜き出したものは「御絵伝（ごえでん）」とよぶ。

註10　岩波の「国書総目録」によれば、存覚の著二巻二冊とする。

註11　欠本の巻十一の題簽は不明であるが、後に述べる巻十巻尾の予告や、巻十二・巻十三の題簽の残部に「四編」の文字が判読できるところから推定した。

註12　この「ヱ」は右上方の印刷がかすれており、或は「ヱ」である可能性も考えられる。すれば、「得」すべてが「ヱ」表記となる。

註13　「けれども」で接続助詞と見ることも出来よう。或は助動詞「けれ」で述べる如く「けれ」「ども」と分離して考えることも可能かも知れない。

註14　「戎狄ノ蜚黎民ノ類コレヲアフキコレヲタツトヒストイフコトナシ」という例文である。〝ス〟をサ変と見るか打消の助動詞と見るかであるが、どちらも難点がある。

註15　「日本文法大辞典」松村明編、明治書院刊によれば、〝上に「こそ」があり、これに応ずる文末が「まい」又は「う」で閉じられる場合その下につく。意味は逆態条件を表わす。〟と記されている。本書の二例は、ともに、上に「こそ」を有し、「せうけれ」の続きを見せている。

昭和六十三年九月十六日受理